



信州大学 経済学部同窓会報

第 11 号

発行者 信州大学経済学部同窓会
同窓会事務局 〒390-8621
長野県松本市旭3-1-1
信州大学経済学部内
TEL・FAX 0263-37-2309

平成23年 5月25日発行

E-mail : k-doso@shinshu-u.ac.jp
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

第十一号の紙面より

- 会長あいさつ 矢口晋司
- 学長あいさつ 山沢清人
- 特集 就活支援
 - ・最近の就職状況と本学部の取組み 舟岡史雄
 - ・インターンシップの現状と課題 天野雅徳
- 理事会報告

- 東京同窓会報告 高木保夫
- 開講します！八ヶ岳自然の森の学校
- 連載 ゼミ「今」
 - 後輩達のゼミ紹介— 青才ゼミ
 - 西村ゼミ
- 会員による業界展望
(「現代の産業・社会事情」担当講師)

- 佐々木千加子 (1985年入学)
- 宮田真輔 (1996年入学)
- 佐竹わか菜 (2002年入学)
- 会員のたより
 - 藤原絹子 (1977年入学)
 - 百瀬礼三 (1984年入学)
- 平成23年度総会案内
- 編集後記

会長あいさつ

同窓会長 矢口 晋司
(1978年入学)

信州大学経済学部同窓会員の皆様におかれましては、各分野で広くご活躍のこととお喜び申し上げます。平素より、母校の発展ならびに同窓会活動に対し何かと関心を頂きありがとうございます。

卒業ならびに入学の季節を迎え、我が同窓会も新たな会員の皆様と準会員（現役学生）の皆様をお迎えすることとなりました。この時期が巡ってくる度に、会員の皆様方がご満足する同窓会活動とは如何なるものなのか、またその実現に向け何をすべきか等を自問自答するわけですが、なかなか具体的なイメージが固まらず、ただただ時間だけが過ぎていくという悩みを痛感する状況です。

さて、今年度の同窓会活動を展開するにあたり会員の皆様方にご理解とご協力をお願いしたいことが二つございます。まず一つ目ですが、平成二十四年三月十九日に設立三十周年を迎える、我が経済学部同窓会の記念行事についてです。設立三十周年記念行事については、昨年一月より三回にわたり理事会を開催し、会員の皆様方の協力、特に記念行事への多くの同窓会員参加無くして成功は望めない、との意見に基づき検討を重ねてきておりますが、その検討をさらに深めるべく、本年度より各卒業年次より二名選出させて頂いている、幹事の皆様方にお集まり頂き、記念行事の在り方、参加者を如何に集めるか、といった内容を話し合せて頂くとともに、今後の同窓会活動の在り方、経済学部との連携、大学に対する協力的体制の持ち方等の意見をお出し頂くべく、幹事会を二回程度、松本と東

京で開催してまいりたいと考えております。幹事の皆様方のご意見を集約させて頂き、それを基に理事会において検討を深め、記念行事の進め方並びに同窓会活動の活性化へとつなげていければと考えておりますので、幹事の皆様方の積極的な参加をお願いするとともに、会員の皆様方のご理解とご協力も併せてお願いいたします。

さて、二つ目ですが、再三再四お願い申し上げております、終身会費納入に關しましてのご報告並びにご確認についてです。平成十九年十一月の総会におきまして、終身会費一万円徴収を決定頂き、文書にて、会員の皆様方に終身会費一万円の納入をご依頼申し上げたところ、趣旨をご理解頂き、三月末現在で一〇〇八名の皆様方よりお振込みを頂きました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。しかしながら、私どもの

説明不足が原因で、まだ多くの会員の皆様方に終身会費徴収の趣旨をご理解頂くことができず、お振込み手続きを完了して頂けない状況となっております。皆様方もご承知の通り、国立大学独立行政法人化以降、大学を取り巻く情勢は非常に厳しい状況となっており、経済学部も削減された研究費の中で成果を期待されるという極めて厳しい環境となっております。同窓会としても学部における学術研究並びに地域連携等に対し、資金面も含め支援体制を検討していく必要性を強く感じているものの、同窓会も大変厳しい財政状況にあり、具体的な支援検討を進められない状況となっております。同窓会員の皆様方の深いご理解を頂く中でこの難局を打破していきたいと考えておりますことから、この場をお借りし、終身会費の納入を再度お願い申し上げます。

同窓会員の皆様方より一層のご活躍をご祈念申し上げますと共に、同窓会もより一層発展、成長して行くことを祈念し、会長あいさつとさせていただきます。

学長あいさつ

信州大学学長 山沢 清人

信州大学経済学部同窓会の皆様には、平素より信州大学の教育研究にご支援を賜り、誠にありがとうございます。本年三月十一日に発生した東日本大震災という未曾有の大災害では、日本ばかりでなく世界中が大混乱に陥りましたが、お陰様で信州大学では、学生や教職員、そして各キャンパスの施設等には直接的な被害を蒙ることなく、全員揃って平成二十三年度を迎えることができましたことを、

何よりもありがたく思っております。しかし、巨大地震と巨津波による被害に加え、福島第一原発の事故により、多くの方々が長期間にわたって不自由で不安な毎日をご過ごしていらっしゃいます。被災されました皆様にお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

震災の影響から、卒業式や入学式を中止したり、規模を縮小して一部の代表学生のみ出席で行なったりした大学も多かったなか、信州大学では、当初の予定どおり全キャンパスの卒業式を行なって、

卒業生を全員無事に送り出し、大学の使命である人材育成を全うすることができました。復興に向けてそれぞれの役割を精一杯果たすと誓って信州大学を巣立った卒業生達は、必ずや、将来の日本を背負って活躍してくれることと信じております。

入学式でも、入学予定の新入生全員を信大生として迎えることができませんでした。彼らは、常に社会に目を向け、自分のできることを模索して努力を続けると決意を述べてくれました。学生生活を送れることに感謝しながら、大学時代の限られた時間を有効に過ごし、社会に役立つ人間になって大きく羽ばたこうという強い意思を感じました。

さて、卒業式及び入学式では、若い学生達への期待をこめて、次のようなお話をいたしましたので、一部をご紹介します。

この二年半の間に、世界は三つの大きな波を経験したと言われております。一つは、二〇〇八年九月のリーマン・ショックに端を発する国際的な金融危機と経済危機です。アメリカの証券会社で投資銀行でもあるリーマン・ブラザーズの経営が破綻し、世界の金融市場に大打撃を与えた大波です。世界の金融システムが大きな危機に晒されました。

二つ目の波は、二〇一一年の初頭にチュニジアで起きた政府への抗議デモからアラブ世界全体に広がった反政府デモです。この一連のデモでは、ツイッターなどのネットワーク通信メディアを活用したメッセージが大きな役割を果たしているといわれております。情報システムが国の有り様を変えるきっかけとなりました。

そして、三つ目の波は東日本大震災における巨大地震と巨大津波です。この震災では、日本のエネルギーシステ

ムの安全性に警鐘を鳴らす事故が起きました。原子力発電のように高度な科学技術の粋を集めた大規模システムを人類は本当に安全に運用できるのでしょうか。日本の社会システムが転換点に来ていることを実感させる事故であります。

エネルギーに限らず、金融・経済、情報、輸送、住環境など生活を直接支える社会システムは高度技術化し、大規模化が進み、さらにグローバル化が進行しているシステムも多くあります。これらシステムの運用は自動化されていますが、不測の事故への対応も含む「システムの保全」は自動化には馴染みません。スキルのある有能な人材が不可欠です。

安全・安心で人に優しい社会システムを構築することが急務となっておりますが、そのためには旧来の考え方にとられない新しい社会システムを作り上げる必要があり、すなわち社会システムイノベーションを実行しなければなりません。信州大学の学生達には、そのイノベーションの担い手として、将来是非活躍してほしいと期待しております。

大震災と福島原発事故では、世界トップレベルの日本の科学技術をもってしても自然の力には到底及ばないこと、高度な大規模システムが生活を支える現代では、迅速に情報を収集して状況を判断し、適切な指示により正しい方向へ導くという、高い能力をもった人材が必要であることが認識されました。科学技術の開発だけでなく、その対極にある歴史、経験に基づいた先人の教訓、社会心理を踏まえた対応といった人文・社会科学系の視点が必要不可欠です。これはまさに、信州大学が力を入れている文理融合型の教育研究であり、文系三学部、理系五学部か

らなる信州大学の役割が、ますます大きくなっていくのは間違いないと見られます。また、日本がこの自然の猛威に立ち向かっている時に、世界では内戦や暴動が続き、多くの血が流れました。被災しながらも懸命に生きようとする人々がいる一方で、戦争がいかに愚かな行為であるかを痛感した日本人も多かったのではないのでしょうか。経済、政治、法律の各分野を専門領域とし、「社会とのつながり」を重視してきた信州大学経済学部には、是非とも日本の復興と世界の平和を信州からリードしていただきたいと願っております。

信州大学は、総合大学として「知の継承（教育・人材育成）」と新しい知の

特集 就活支援

最近の就職状況と 本学部の取組み

就職委員長 舟岡 史雄

最初に、このたびの未曾有の大震災の被害を受けられた方に、心よりお見舞い申し上げます。私事では、震災地の近隣に勤務するゼミ生の無事に安堵する一方、多くのゼミ生から心配してくる電話やメールを受け取りました。あらためて大学時代の絆の深さを認識し、嬉しく思う機会となりました。

昨年四月から就職委員を担当しています。リーマン・ショック後の景気の急激かつ大幅な落ち込みから二〇一〇年度は厳しい就職状況が予想され、その対処を委ねられました。これまでは本学部生は一貫して恵まれた就職環境にあったといえます。大都市の有力私

創造（研究）に注力する社会的な使命を担っております。従来にも増して、信州の「知の森」をさらに豊かに大きく育てなければならぬと決意を新たにいたしました。

就職員をはじめ構成員や関係者の皆様一人ひとりが、信州大学の役割と将来を考え、行動することによって、必ず個性輝く大学としてさらに大きく発展し、教育研究をより充実させられると信じております。それが、日本全体、そして世界が真に持続可能な発展を遂げるための貢献につながります。経済学部同窓会の皆様にも、一層のご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

大等と比べて、スタートが遅い、大した準備もない、エントリー企業の数も少ない、等々も何のその、就職率は九十五%を超え、ほとんどの学生が志望する企業に就職していききました。こうした状況は二〇一〇年度から一変し、企業の採用予定者数は大幅に減少し、大半の大企業では六月頃に文系学生の採用を終了しました。それ以降は内定辞退者が出て、理系学生や留學生に対してのみ門戸が開かれているといった厳しさでした。本学部では就職活動を支援すべく、四月以降の毎月全員について活動状況をモニターし、ゼミの指導教員と就職委員会が一体と

なって、求職活動中の学生をサポートしました。企業の追加採用等の情報の提供、面接等の指導、県内企業への採用働きかけ等々を積極的にを行い、その結果、二〇一〇年度の就職率は前年度の九十六%を超えて九十八%となりました。大卒者の就職率が全国平均で八十%弱と伝えられていますから、大いに誇ってよい結果といえます。

これには、信州の自然と卒業生の皆様の存在のお陰が大きいのではないかと思います。豊かな自然は都会の大学生が得られない感性としなやかな実直さを身に付けさせます。企業の面接では、他大学の学生とは一味違ったキラリとした光るものをアピールできます。これに加えて、卒業生の皆様が社会で大いに活躍され、有為な人材となつて、世の中で高く評価されているからです。リクルータとして来学される先輩の推薦を受けること、面接を一回パスさせてもらえる企業も少なからずあります。卒業生の皆様は大いに感謝する次第です。

昨今、志望大学を決める際、就職状況が大きなウェイトを占めるようになってきています。学部の就職支援の内容は顧客満足度に大きく影響します。高校生向けの学部説明会や新入生向けのガイダンスに保護者が同伴するのは当たり前になっていて、親子ともども真剣なまなざしで聞き入ります。充実した就職支援は今や入試においても必須と判断し、二〇一〇年度においても必須のようなプログラムを実施しました。以前だったら考えられませんでした。

就職委員会へ

自己分析・企業分析の指導↓7月ガイダンスまでに、指定のフォーマットで提出

就職ガイダンス・スケジュール

▽5月26日 進路先別のガイダンス 企業と公務員のいずれの志望かをメールで

＊公務員志望者に対して別途のガイダンス
▽7月7日
夏休み期間中の活動の指示
・演習論文
・SPI等の学力試験への取り組み
・英語等、時事ニュース等への親しみ

・就職活動資金の確保（30万円～40万円）等々
▽10月6日
エントリーシートの書き方の指導
▽10月15日
就職マナー講習会
指導者：(株)イーディーワンの9名
▽11月17日
筆記試験対策指導及びSPI模擬テスト実施等
▽11月24日
今後の活動方法の指導等

二〇二一年度は大震災の影響で採用時期を遅らせる企業が相次いでいます。松本を離れて大都市圏で就職活動する本学部生にとっては、長期にわたる就職活動で心身ともに疲れるでしょうし、活動資金においても不利に働きます。何とか、信州大学経済学部生魂で、この苦境を乗り越えてくれることを切に願っています。

＊公務員志望者に対して別途のガイダンス
▽12月
12月ガイダンスまでに演習論文の完成
▽1月12日
メイク講座・身だしなみ、女性のみ化粧方法（資生堂社員9名の協力）
▽1月19日
グループディスカッションの実践及び指導（4年生の協力）
▽1月26日
個別面談（教員、リクナビ、マイコミ等）
▽1月以降
会社説明会（日本銀行、政策投資銀行等々）
▽2月以降
最新情報の提供

インターンシップの現状と課題

交流系科目部会インターンシップ担当
天野 雅徳

「大学から社会へ、社会から大学へ」をキーワードとする当学部では、学生自らが社会との交流・経験を深めることを促す目的で、他大学に先駆け一九九八年度から一定の要件を満た

すインターンシップに対し単位認定を行い、これを推奨しています。年によりかなり変動がありますが、三年生を主体に毎年夏季・春季併せて三十名強から五十名弱程度の学生に単位認定していることから、概ね経済学部生の五人に一人はインターンシップの単位を取得し卒業しており、この他単位認定を求めず独自にインターンシップに参加（例えば単位認定要件に該当しない二・三日程度の短期インターンシップへの参加など）する学生も勘案すれば、学生のインターンシップ体験率は四分の一程度といったところが現状かと思われまます。

その留意点とは、一言でいうとインターンシップの就職活動前倒し効果、青田買い促進効果です。買い手市場とは言え企業サイドは早めに優秀な学生の目星を付けておきたいという誘因がどうしても働きます。企業の社会的責任(CSR)を果たすと同時に、直接的なメリットも追求してくる動きは排除仕切れません。一つの極端な例は「ワンデー・インターンシップ」と呼ばれるインターンシップに名を借りた実質的な企業説明会です。これは大学三年生の十月からスタートとされている広報活動の実質的な前倒しにほかなりません。一日ではさすがに外聞が悪いので、最近では期間を二・三日程度にし、コストを節約するプログラムも目立ってきています。もう一つは長期に渡るインターンシップで、学生を鍛えるのにそれなりにコストは掛けるものの、一定期間経過後は戦力として活用することでコストを回収するというもので、形を変えたアルバイトともいえまます。

本学が単位認定するインターンシップ制度は、こうした企業サイドの思惑を抑止するような制度設計（原則八十時間（十労働日）・最低四十時間（五労働日）となっており、青田買い目的の短期インターンシップを排除すると同時に、ようやく使いものに成ってきたところで研修を終了させることで、CSRを主たる目的とする企業でない限り遣り切れぬプログラムとなつていくのが特徴です。

インターンシップの留意点
インターンシップに関しては、特に就職状況が厳しくなり、また実践的な職業能力を持った学生の育成を求めている社会ニーズも高まっている時節柄、賛成意見が強いと思われるので、担

でもない」ことを自覚させること、ソクラテス流の「無知の知」の自覚にあると考えています。

「経済学科」、「経済システム法学科」の二〜三年生（実質的な在籍期間は満一〜二年）というだけで、それなりに社会に通じる経済学や法律学の知識が身につけているという思い込みが、実社会での経験により打ち砕かれ、一般に「頭でっかち」であると評される学生が絶対水準においては「頭でっかち」ですらなく、社会で求められる水準と自分の現状との著しいギャップに直面させられることがインターンシップの真骨頂です。こうしたショックは、いざ就職活動などの際に直面する問題ですが、インターンシップの良いところは、失敗が許される、むしろ失敗してその原因を自ら検証してみることこそが明日への糧となるという意味で、どちらに転んでも学生にとってためになるプログラムだと言えます（失敗の相手はさせられる受入企業・団体の方には誠に申し訳ありません）。

また、首都圏、近畿圏と比べて他大生との交流の機会が限られる信大生にとっては、インターンシップを通じて価値観や行動様式の異なる他大の学生との交流は大きな刺激となり、触発されることも多いようです。特に、のんびり屋と言われる信大生にとって、首都圏、近畿圏等でのインターンシップの経験は、情報取集面を含めその後の就職活動に大いに役立っているように思われます。

直面する課題ー拡大の限界
以上インターンシップの得失について述べてきましたが、二年連続でインターンシップを担当した者として言えるのは、インターンシップは総じて学生にプラスの効果をもたらします。それは元々問題意識の高い学生は当然のこととして、受講の動機が単位不足の

補充というやや次元が低く不純な学生であっても、頭で分かっていることと、実際に言うこととは別物（例えば、得意先で連れて行ってもらった際にろくなあいさつや受け答えができなかったなど）であることを実感できた学生は、一回り大きくなってキャンパスに戻ってきます。

しかし、現実にはアルバイトの延長線上を越えられないまま戻ってくる学生がいることも偽らざる事実です。現内閣の定めた新成長戦略（平成二十二年六月）の雇用・人材戦略の実行計画の中には、二〇二〇年までに「大学のインターンシップ実施率一〇〇%」と掲げられていますが、インターンシップに何らかのメリットを感じる学生四分の一の送り出しすら問題がある現状で、さらに量的拡大を目指すに確実に質が劣化します。また、質を維持しつつ拡大するというのは言うが易く行うに難しです、おそらくヒト・モノ・カネと時間のかかる別途の体制整備が必要かと思われまます。

このような送り出しサイドの問題に加え、最近では受入れサイドでの問題も発生しています。昨年度（平成二十一年度）までは、厚生労働省の補助金に基づいて長野県経営者協会が会員企業と学生（信大のみならず長野県の全学生）との間のインターンシップを仲介しただけでいたものが、本年度（平成二十二年年度）からは補助金廃止により、各大学・学部が個別に受入れ企業・団体と交渉する旧来のシステムに戻りました。

これによりインターンシップを希望する学生の応募方式は、企業のウェブサイトを就職情報サイトのインターンシップ紹介サイトからオープン参加する方式（当学部ではこれを自己開拓、Aコースと呼んでいます）と、従来の受入れ先企業・団体と学部との縁故に

基づく方式(当学部ではこれを学部紹介、Bコースと呼んでいます)になりましたが、後者の方式は、信大経済学部だけを特別扱いしにくいことや応募者ゼロが連続したなどの理由でリストが年々先細りとなっております。また、長野県に数多く存在する有力な製造業もリストに含まれていないことから(経営者協会に問い合わせた際に、現時から製造業は理系のみが主流、学生へのアピール力に欠けるのが現状で、この受入れサイドの要因もインターンシップの制約要因となっております。)

もとよりインターンシップの教育効果から見れば、自ら交渉し、受入れ先を担当しては当然Aコースを推奨しているのですが、実際には学部が関与し背中を押す形で送り出すBコースの学生でも「無知の知」を学んで来た者は大きく成長し戻って来ていることから、過保護ながらもBコースで対応いただける県内企業が他に無いものかと考えている次第です。

この原稿が掲載されるのは五月末のことなのでタイミング的に本年度は厳しいかも知れませんが、卒業生の皆様が在籍される企業・団体の中で、信大経済学部の後輩なら夏季休業期間中(八月初旬〜九月三十日)、原則八時間・最低四十時間程度のインターンシップを受け入れても良いと言われる所がございます。学部学務係あてご一報いただくと幸いです(結果として応募者ゼロとなる可能性もあることをあらかじめ寛恕下さい)。

経済学部同窓会理事会報告

日時：平成22年10月30日(土)

午後2時より

場所：信州大学経済学部研究室

- 1 開会(樋口教授)
- 2 同窓会長挨拶(矢口会長)
- 3 経済学部長挨拶(徳井学部長)
- 4 自己紹介
- 5 報告事項

(1)平成22年度同窓会活動報告について

・前回理事会以降の活動内容について
矢口会長より報告。

(2)信州大学同窓会連合会活動報告について

・前回理事会以降の活動内容について
矢口会長より報告。

(3)学部支援金収支報告について

・学部活動支援金の収支内容を長瀬副学部長より報告。

◎会則に従い、矢口会長を議長に以下について協議。

6 協議事項

(1)終身会費の徴収状況について

・平成22年8月末現在、938名であることを確認。

・今後も会員への依頼を重ね、徴収率を上げることを確認。

(2)幹事会の開催について

・松本と東京で開催し、同窓会活動や同窓会設立30周年記念行事等について意見交換を行うことを確認。

(3)同窓会設立30周年記念行事について

・平成24年3月19日に同窓会設立30周年を迎えるにあたり、記念行事の在り方について意見交換を実施。

◎議長退任

7 閉会(矢口会長)

◎午後4時に閉会となる。(会長)

日時：平成23年1月29日(土)

午後2時より

場所：信州大学経済学部研究室

- 1 開会(樋口教授)
- 2 同窓会長挨拶(矢口会長)
- 3 経済学部長挨拶(徳井学部長)
- 4 自己紹介
- 5 報告事項

(1)平成22年度同窓会活動報告について

・前回理事会以降の活動内容について
矢口会長より報告。

(2)信州大学同窓会連合会活動報告について

・前回理事会以降の活動内容について
矢口会長より報告。

(3)その他

・山本進元教授の逝去ならびにお別れの会について、矢口会長より報告。

・同窓会員計報に対して、同窓会として特別対応は行わないことを確認。なお、訃報連絡が同窓会事務局にあつた場合については、会長判断で弔電対応のみ行うことを確認。

◎会則に従い、矢口会長を議長に以下について協議。

6 協議事項

(1)終身会費の徴収状況について

・平成23年1月25日現在、998名

東京同窓会報告

副会長 高木 保夫

(1977年入学)

であることを確認。

・今後も会員への依頼を重ね、徴収率を上げることを確認。

(2)信州大学同窓会連合会——学生及び卒業生表彰の推薦について

・経済学部同窓会としての推薦者は残念ながらいないことを確認。

(3)幹事会の開催について

・幹事会だけでなく同窓会の活動も含め討議。

・今後の開催予定に従い、準備を進

めていくことを確認。

(4)同窓会設立30周年記念行事について

・平成24年3月19日に同窓会設立30周年を迎えるにあたり、記念行事の在り方について意見交換を実施。

・今後も大学、学部と連携をとりながら検討を重ねることを確認。

◎議長退任

7 閉会(矢口会長)

◎午後4時40分に閉会となる。(会長)



講師 根津八紘先生

二月の第一土曜日が吉例の、信州大学東京同窓会が、アルカディア市ヶ谷で行われました。総勢百四〇名、本会からは矢口会長以下五名が出席しました。最初に農学部出身で昨年度の講演者であった田辺治さんが、九月二八日にダウラギリで雪崩れに巻き込まれ一命を落とされたため、出席者全員で黙祷を捧げました。日本で五指に入るアルピニストの若すぎ急逝を惜しみました(享年四九歳)。

れた医学部三十九年卒業の川口義明さんは、現代の医療事情について、産科の置かれているバックグラウンドとしてお産のたらい回しはなくなり、病院が淘汰されたこと。国の低額医療政策が、政権が替わって見直されてきたこと。世界で最初に試験管ベビーを誕生させて六〇年近くなり、四百万人が生を受けたこと。根津先生は、所属学会の除名や医師免許剥奪かという恐れにも負けずに現場を陣頭指揮していることなど話されました。

講演の冒頭根津先生は、信州大学に恥をかかせる事は決してしなかった、そういう観点で話を聞いて、少しでも多くの方からご理解をいただけたらと語り始めた。生まれる、旧本郷村の原地区、女鳥羽川にかかる原橋のたもとに昭和十七年の海軍記念日に生をうけた。絵が飯より好きで、授業そっちのけで絵ばかり描いていた。父からは「貧乏絵描きにはなるな」と言われていた。工学部航空工学を志望するも大側と意見合わず、かろうじて信大医学部にすべりこんだ。医学部も闘争で授業ボイコットだった。へそ曲がりの私は、一人だけ授業に出た。前には、



教授と医局員四、五人のみ。「きょうの講義は、試験に出す」と言われ、はじめからおわりまで聴き取りし、クラス全員にコピーを渡した。先輩に啓発されて、沖繩へ赴き、ハワイ大学のインターン・レジデントの二期生となったことなどを話されました。五年経て信大へ帰り、母乳哺育との関わりの中でその成果を、『乳房管理学』『目で診る乳房管理学』として本にまとめることもできたそうです。

開講します！
八ヶ岳自然と森の学校
二〇一一年度の八ヶ岳自然と森の学校の開講予定ができました。全部で一六コースあります。各山小屋で、工夫を凝らした企画を取り揃えております。会員各位、一般の皆さま、八ヶ岳自然と森の学校にふるつての御参加をお待ちしております。申し込みは、直接各山小屋へお願いします。
【問い合わせ先】 高木保夫 takagiya@pod2.lev.ne.jp

表した当時は四四歳。一開業医として目の前の患者さんのために毎日夜を問わず、必死で診療に向かう中で、良かれと思つてしたことでした。その私がある日突然、日本中から大パッシングを受けることとなったのです。私は、奈落の底に落とされるような、正に人格否定をされ、猛烈に悩み、苦しみ、落ち込むこととなりました。しかし、どう考えても「全員中絶するのは良く、二人助けるのはいけない」という論理に納得がいきませんでした。その時の経過や思いは、『減胎手術の実際』（近代文芸社）にまとめてありますと話された。熱を帯びた講演は、九十分を超え、その後も多くの質問が寄せられました。

2011年 《八ヶ岳自然と森の学校》開講予定

Table with 8 columns: No., 日程, 曜日, 講座名, 講師名, 講師内容, 宿泊場所, 備考. It lists 17 courses for the 2011 'Yamanote Nature and Forest School' with details on dates, topics, instructors, and fees.

参加料は、15,000円(税込)。料金には、1泊2食付き宿泊代、受講料、保険料が含まれます。
No.5.8.9.15 は、12,000円(税込)。
No.11.16 は、1泊2日、2泊3日をお選びいただけます。
料金No.11 1泊12,000 2泊22,000、No.16 1泊15,000 2泊25,000。 ◆印は、JR茅野駅までの送迎あります(無料)。

連載

ゼミ「今」

—後輩達のゼミ紹介—

青才ゼミ

原 幸人

青才ゼミの二〇一一年度のゼミ長になった原幸人です。今回同窓会報でゼミを紹介させていただくのですが、この文章を書いている時点ではまだ今年度のゼミは始まっていないので、昨年度の内容を中心に青才ゼミの近況をお伝えしたいと思います。

昨年度のゼミは青才高志先生と十二名のゼミ生に新しくゼミ生六名が加わった総勢十九名で始まりました。私たちのゼミは毎週ごとのゼミの時間を前半と後半に分けており、前半では一人のゼミ生が事前に作成しておいた本人が興味を持った特定のテーマに関するレポートを用いて、それに関してゼミ生全体で議論・討論を進めます。そして後半では一つの経済のテキストとそれをゼミ生が事前に要約したレジュメを用いて、経済の特定のテーマについて知識を深めます。前半に関しては昨年度は消費税引き上げ問題、選択的夫婦別姓問題、TPPなど幅広く多様なテーマからの問題提起と、それに対する議論・討論によって知識の共有化が行われました。また後半に関しては五月から十月まではグローバル資本主義の変動についての文献を講読し、そ

の後四年生の演習論文の検討会を行いました。そして十二月以降はリーマンショック後の各国の経済情勢について文献を通して学びました。

青才ゼミの特徴として、それぞれのゼミ生が問題意識や自分の意見を持ってそれを相手に示すことを目標としています。ゼミの前半で行う個人作成のレポートでの議論・討論は毎回作成者が議論か討論かの形式を選びます。議論形式の場合は基本的に挙手制で、挙げられた問題の解決策等の意見を述べていきます。また討論形式ではゼミ生が二手に分かれ、自分たちの中で意見をまとめ発表し、さらに相手側の意見を受けてそれについての反論・意見を行います。ゼミの後半に行う文献を用いた学習では、文献を読んで感じた疑問・意見について先生に質問することや他のゼミ生とそれらを交換することや他のゼミ生とそれら交換することや内容を広げて新たな知識を得ようとして、時々関連する内容が大きく広がって、ゼミの時間が大きく延びることがあるほどです。こうした中で前述した目標を達成しようとしています。また取り上げるテーマ・文献は学生主体であり、その自由度の高さも青才ゼ



ミの特徴の一つとなっています。

青才ゼミでは毎年夏季休業中にゼミ旅行を行います。昨年度は九月に大阪・京都へ向かい大阪の造幣局本局、京都の島津創業記念資料館を見学しました。造幣局では貨幣が製造される工程や日本の造幣の歴史を学びました。また島津創業記念資料館では明治から昭和にかけて教育用に使われた理化学器械などを見学しました。このゼミ旅行で私は経済学部生として経済活動の基軸となっている通貨の知識、教育をうける大学生として日本の教育の知識を得ることが出来たと感じました。さらに青才ゼミでは学期初めと末を中心にコンパを行い、ゼミ旅行と合わせて、学内のみではなく学外でもゼミ生同士や先生とで親睦をより深めています。

以上のことが青才ゼミの活動です。今年度の青才ゼミでは、その特徴である自分の意見を持ちそれを示すという目標をより達成するため、先輩たちに負けないよう活動に力を入れていきたいと考えています。そしてそれを次の後輩に示すことでゼミを一段と活気のあるものにしていけたらなと思います。

西村ゼミ

岸 俊輔

二〇一〇年度西村ゼミのゼミ長の岸俊輔です。私は二年生から始まった二年間のゼミ活動を終え、現在は就職活動をしています。西村ゼミで過ごした二年間はとても充実した日々であり、今となつては良い思い出です。信州大学経済学部のOB、並びに西村ゼミOBの方々に、昨年度のゼミ活動についてご報告させていただきます。

西村ゼミはゲーム理論について研究しており、前年度は総勢二十五名で活動しました。ゲーム理論とは、「対立

している複数の人間が、ルールが決まっている状況下で、自己の利益が最善となるにはどのように行動したらよいか？」を研究する学問です。西村ゼミでは、毎週課題としてゲーム理論の問題を先生に出していただき、三年生・二年生混合の班を作り、班ごとにそれぞれ解答をレジュメにまとめ、次週のゼミで発表するという形でゼミは進行していきます。課題の問題を解くために、上級生が下級生をフォローしつつ、各々の班でゼミ以外の時間にも集まり議論を交わすため、班のメンバーとは自然と絆が深まっていきます。ゼミ中は、それぞれの班が解答を発表し、それについて先生や他の班が意見を述べるため、ゼミ室は活気づいているのが特徴です。

前年度の活動内容は、テキストを用いて実験経済学の歴史と基本について学び、後期はそれらを踏まえて、特定のゲームの場面（今年度は入札市場）を実験室で再現し、入札者の行動をデータとしてとり、それを分析するための



に、自分たちで実験をデザインして実施・分析を行いました。後期の活動は、上級生も初めての試みだったため、何度も実験デザインを決める議論を重ね、試行錯誤を繰り返しました。先生の手助けもあり、班それぞれが納得のいくデザインを決め実験を行うことができました。文系である経済学部は、理系とは違い実験を行う機会がほとんどありません。自分たちで実験デザインを考え、実施し、データをもとに考察をするこれら一連の作業は、問題提起力・データ整理力・論理的思考などが要求され、社会人になっても必ず役立つ力が養えたと考えています。これらは普段の学校生活では決して体験できないため、文系にいなながら実験ができる西村ゼミは、他のゼミとは異なる経験ができるのではないのでしょうか。

また、西村ゼミはゼミ以外の場でも積極的に活動していることも特徴です。同じ班以外のメンバーとも親睦を深めるため、年四回の飲み会、春のボーリング大会、夏のゼミ合宿などを行っています。このような場で、西村先生も積極的に参加していただき、先輩や後輩と交流が深められたと思います。毎年ゲーム理論で扱う内容は違いますが、このような流れでゼミ活動は進んでいきます。自分ももうゼミ活動に参加することはできませんが、ゼミで学んだことを活かし、今行っている就職活動に役立てたいと考えています。今後の後輩には、自分たちの代よりもさらに活気づいたゼミ活動をし、有意義な時間を過ごしてほしいです。



会員による業界展望

「現代の産業・社会事情」担当講師

国立大学法人 となった信州大学

国立大学法人信州大学

佐々木千加子

(1985年入学)

私は平成元年三月に経済学部経済学科を卒業後、新卒で地元企業に採用され十ヶ月勤務した後、その職を辞して国家公務員試験を受験し、平成三年四月に信州大学職員として採用されました。すでに二十年の時が流れようとしています。

採用時の配属は医学部学生係という奨学金等の学生支援担当でしたが、そこを振り出しにして本部庶務課、医療技術短期大学部(現在の医学部保健学科)、共通教育、人文学部と異動しながら、(残念ながら)経済学部配属されたことはありません。平成二十年四月から平成二十二年七月まで総務部人事課人材育成グループにて職員研修などを担当していました。平成二十二年四月の新任職員研修で新規採用された事務職員に対して行われた大学についての説明の資料からかいつまんでご紹介したいと思います。

信州大学は、平成十六年度に国立大学から「国立大学法人」となりました。つまり平成十六年度から信州大学は、国ではなく、「国立大学法人信州大学」が設置する大学となったわけです。「国立大学法人」とは国立大学を設置することを目的として、国立大学法人法に定めるところにより設立される法人のことです。国立大学の設置、運営というミッションを果たすため、国立

大学法人に対しては国からの出資がなされ、更に毎年度運営費交付金が措置されています。

国立大学法人は、①文部科学大臣によって示された中期目標に基づく中期計画の作成により、戦略的運営を実現し、個性化を促進する。②役員会制度において学長の下でトップマネジメントを実現。学長の下に人事を一元化。③非公務員型を採用することで、弾力的な人事システムを可能にする。④使途を特定せず、繰越のできる運営費交付金制度の導入などによって自主的・自立的運営を確保することが求められています。

また、役員会、経営協議会に学外者が参画することで、大学運営を学外者がチェックします。これにより国民・社会の意見を大学運営に反映。さらに事後チェックを重視しています。まためれば、自主的・自立的運営を確保しつつ、第三者による業務評価(教育研究の質を含む)を行い、これを予算配分に反映することで競争を促すというものです。広く民間では当然のこととは言え、手厚く保護されていた国立大学時代と異なり、大学は学外からの評価によって競争をしながら、予算を獲得していくわけです。それは、国立大学にとつては一つのターニングポイントであるのは間違いないでしょう。

このような状況下の大学職員といえど大勢の方が思い浮かべるのは、学生対応をする学務の職員ではないでしょうか。本学に採用面接に来られる学生さんほとんどが大学職員のイメージとして学務の職員を思い描いているようです。しかし、実際にはさまざまな

部署で働く大学職員が大勢います。

たとえば民間会社と同じように総務や人事部門、お金を扱う経理部門、物品等の調達部門、施設や建物の管理部門、広報部門、そして研究をハード面ソフト面から支援する部門。一口に学務といっても、入試担当、教務担当、奨学金や寮、サークル活動支援や悩み相談などの学生支援担当部門、国際交流担当部門など多岐に渡ります。

私たち国立大学の職員も従前のような仕事の仕方ではもはや済まされません。しかし、規則どおりに行うことは是とされた公務員時代の仕事との格差は大きいものです。突然に自立的な仕事振りを求められる意識改革というのは大変難しいものだというのが率直な感想だといわざるを得ません。

ただ、視点を変えると国立大学法人の教職員がおかれている現状は、とてもチャレンジングなものです。信州大学の職員になると、今まで誰もやったことのないような新しい仕事に取り組み機会が多いということですね。しかも母校がチャレンジのステージとなることができます。母校の発展に寄与することができれば、それは何にも替えがたい喜びです。

国立大学法人化に伴い、国立大学法人等の職員の身分は、国家公務員から非公務員型の法人職員へと移行したため、職員の採用方法は人事院が実施する「国家公務員採用試験」から国立大学法人等が独自に実施する「国立大学法人等職員統一採用試験」に変わりました。国立大学法人等職員採用試験は北海道、東北、関東甲信越、東海・北陸、近畿、中国・四国、九州の7つの地区の実施委員会が実施します。今年度の応募期間はすでに終了していますが、国立大学法人等職員採用試験以外にも、信州大学が独自に採用試験を行うこと

があります。情報は信州大学のホームページをチェックしてみてください。

自動車業界展望

三菱自動車工業(株)

宮田 真輔

(1996年入学)

昨年、ゼミの指導教官であった、都築先生より「現代の産業・社会事情」についての講師を仰せつかり、自分の社会人としての経験が後輩の皆さんのお役にたてばと思ひ、お引き受けしましたが、今度は経済学部同窓会より、同窓会報に「業界展望」を執筆するようにものご依頼を頂き、大役に恐縮しつつも、今回も母校のお役にたてればと思ひ、寄稿させて頂きます。

さて、私は現在三菱自動車に籍を置いています。今回業界展望というテーマを頂き、自分の知りうる範囲で、自分が身を置いている自動車業界の展望について書かせて頂きます。

自動車業界と言うとトヨタ、日産といった名前を思い浮かべる方が多いかと思いますが、そういった完成車メーカーだけでなく、バス、タクシー業界ガソリンスタンドや自動車保険、車のローン会社、自動車販売店、中古車業者、そしてサプライヤーと言われる部品メーカーなどの関連産業すべてを指します。よく日本の基幹産業などと言われますが、ある統計によると日本の総労働人口の約8%を占めると言われています。つまりそれだけ経済に与える影響の大きい業界とも言えます。そんな自動車業界ですが、一方で非常に競争の激しい業界でもあります。ここでは、今後各社が生き残りを図る上で外せない三つのキーワードを中心にご説明していきたいと思います。

まず、第一のキーワードは「市場の変化」です。これまで自動車は、日、米、欧といった先進国を中心に普及してきましたが、これらの国々では、既に対人口比五〇%を超える普及率となっており、今後大きな市場の拡大は望めません。一方、発展途上国(特にBRICSと言われる国々)を見ると、こちらは対人口比で普及率は一〇%に満たない国も多く、これらの国々が今後経済発展を遂げるにつれ、さらに市場が拡大すると考えられます。特に中国に至っては、二〇〇八年の統計で米、国を抜いて世界最大の自動車販売大国となっており、今後これらの市場で販売を伸ばすことが、各社にとって生き残りの道であることは言うまでもありません。しかしながら、これらの市場では、一部の例外(インドでシェア一位のスズキなど)を除き、日本メーカーは、米、欧、韓国メーカーに対して必ずしも優位に立っているとは言えず、今後いかに販売を拡大していくかが大きな課題となっています。

一方、先進国、特に日本国内では、最盛期七〇〇万台を売っていた市場がすでに五〇〇万台を切るレベルまで落ち込んでいます。車が売れないとなると、先ほど基幹産業と言っていたことが、それは関連する産業が縮小することを意味し、最終的には雇用にも影響を与える深刻な事態となります。そのため、昨今日本国内では、各社とも車検や点検などのアフターサービスでの収益を改善するなどして、車一台からの利益率を改善したり、販売店網を再編して市場に合った販売体制を構築するなどして、生き残りを図っています。

第二のキーワードは「業界再編」です。日本には、十二成車メーカー(商用車含)がありますが、かつて九十年代、GMがいます。スズキ、スバル、フォードがマツダ、ルノーが日産、ダイムラーがクライスラー、そして三菱

に出資していたように、多くの会社が外資の出資を受け入れていました。それぞれ各社の事情もあって一概には言えませんが、一時、次世代の環境技術、燃費効率を達成するために開発費用が必要で、その投資を行うためには、ある程度の規模（一説には四〇〇万台の販売規模とも）が必要で、その傘下に入らない中小のメーカーは淘汰されるという考えがあったと言われています。しかし、結果的に、GMは倒産し、ダイムラーは、クライスラー、三菱への出資を解消、フォードはマツダへの出資比率を大幅に下げ、その考えが必ずしも当たっていなかったことが証明されています。近年では、スズキとフォルクスワーゲン、ダイムラーと日産・ルノーが低い割合での株の持ち合いによる提携をしたり、日本企業間では車種のOEM提供（日産―三菱マツダ―日産、スズキ―三菱など）による、資本で傘下に入れるのではなく、各社の戦略に応じて必要な部分を補完するゆるやかな提携が主流となっけています。

第三のキーワードは、次世代車などの「環境技術」です。昨今の環境意識の高まりや原油価格の高騰を受け、環境にやさしい低燃費の車作りが各社の課題となっけています。次世代車というと、電気自動車や燃料電池車などが言われますが、そういった車は、まだ値段が高い、走行距離が短い等、一長一短あるため、すぐに爆発的に普及するものはありませんが、今や主流となつた、ハイブリット車や低燃費の小型車のように、環境にやさしい、消費者のニーズにあった車であれば、市場で受け入れられるのは、間違いありません。このように、次世代環境車で勝った企業こそが、次に生き残ることができ、一方で昨今の小型化、低燃費化という競争に負けた米国のピックアップが淘汰されてしまつた（理由はそれだけではありません）ように、環境技術競争で負けた会社は生き残ることはできません。将来的にどのようなタイプの車が主流となるかわかりませんが、環境性能の優れた、魅力的な車を作ることが、自動車メーカーが生き残るために必要な条件だと言えます。

このように、自動車業界を取り巻く状況は非常に厳しく、正直、十年先ほどの会社が生き残っているかはわかりません。しかし一方で変化に富んだ、面白い業界であることは間違いないと思います。信大に関連ある皆さんが、少しでもこの業界に興味を持って頂けたら幸いです。

建設 コンサルタント?

（株）新日本コンサルタント
佐竹 わか菜
（2002年入学）

「建設コンサルタント」。同窓会報をご覧になった方の中で、このような職業を聞いたことのある方は一体何名ほどいらっしゃるのでしょうか？ 行政にお勤めの方は別として、大半の方にとっては、初めて聞く職業となるのではないかと思います。

それでは、「社会資本」という単語はどうでしょうか？ 「社会資本」であれば、何となく聞かれたことのある方もいらっしゃるかもしれませんね。

社会資本とは、たとえば「暮らしやすいまち」「心地よい公園」「家の近くを通る道路」「通勤や通学で使う鉄道」「エネルギーや水資源を供給するダム」「災害を防ぐ堤防」などの、社会・経済活動を支える公共性の高い施設を指します。このように考えると、私たちの生活は、実に様々な社会資本に支

えられていることがわかります。私たち建設コンサルタント業界とは、社会資本の整備の一端を担う業種であり、人々が快適な生活を送れるようにするための社会基盤を陰で支える業界であるといえます。

具体的にどのような流れの中で仕事をしているのかというと、社会資本を整備する中では「発注者（政府や官庁、地方自治体など）」「建設会社（実際に工事を行う）」「建設コンサルタント」の三者が登場します。その中で建設コンサルタントは、発注者に代わって建設プロジェクトの企画・立案、事前調査、設計などの一連の技術サービスを提供し、中立的な立場からプロジェクトを推進していく立場となるのです。

このような建設コンサルタントの中で私は、自分たちの街を住みよくするための様々な規制や計画を企画・立案する部署に属しています。例えば、景観を守るためのガイドラインの制定や公共交通の運行計画、土地利用方策の検討、交通金を活かしたまちづくり計画の立案など、その内容は非常に多岐に渡ります。

それでは、私がおこなうような業務に携わっているのか、実際に関わったプロジェクトの裏話を通じて紹介させていただきます。

ある自治体では「公共交通を中心としたまちづくり」を進めており、その一環として、工業団地と最寄り駅とを結ぶ無料の通勤シャトルバスの運行実験が数年前に行われました。しかし、バス事業の立ち上げは当社にとつても未知の世界であったため、担当者全員で手探りによる計画策定が始まりました。

まずは運行計画の立案です。使う側の視点に立った計画の企画・立案が重要となるので、対象となる工業団地に何度も足を運び、多くの従業員の方々と協議を深めながら運行計画を立案しました。

ルート策定については、核となるルートは既に存在していたため、より便利なルートにしようと思いましたが、新設を検討しました。しかし、バス停数を増やせばその分だけ運行時間は長くなります。また、民間バス会社との競合は避ける必要があります。条件に見合う位置を求めて散々悩みましたが、最終的には必要最低限の場所に新設して、運行後にはそれぞれに利用を得ることができました。

また、ルートが決まった後はダイヤの設定です。法定速度で路線を試走し、バス停間の走行時間を計測しますが、「朝の渋滞」「信号の待ち時間」など、扱いの難しい問題が次々と発生します。手探り状態で試走を重ねることで目安をつかみ、ダイヤを設定しました。

バスダイヤの改正も難題だった作業の一つです。通勤シャトルバスは最寄りのJR駅との接続を基本としているため、JRダイヤが改正される度にバスダイヤも改正します。しかし、単に列車のダイヤに合わせればよいほど甘くはなく、利用状況や道路の混雑具合などの様々な要因を調整する必要がありました。一便の時刻設定を数分変更しただけで他の便に大きく影響が出るバスダイヤはパズルのようで、ダイヤ

修正の度に頭を抱えていました。

他にも、運行開始後には利用者の意見を参考にしながら運行内容を見直ししたり、分かりやすい広報資料を作成するなど、利用者のニーズを満たすことを常に心がけました。

このように立ち上げられたバス事業、運行開始当初はどのぐらいの利用者数を得られるか心配でしたが、運行開始後には工業団地の従業員はもちろん、県外からの出張や視察の際など、徐々に幅広い用途に利用されるようになりました。幸いにも利用者数は徐々に増加し、途中で当初の想定を越えた利用者数を得られたときには、関係者一同で喜び合いました。

私たち建設コンサルタントは表舞台に出ることはなく、社会でもほとんど知られていない、正に黒子です。しかし、たとえ表に出ることはなくても、自分たちが設計した社会資本を利用する市民の笑顔を見たときには、今までの苦労など吹き飛ばしてしまいます。

このように、利用者の笑顔から仕事の遣り甲斐を感じられるのは私たちの醍醐味であり、皆さんの喜ぶ顔に支えられて私たちはここにいるのです。今後とも黒子として、皆さんの笑顔を増やすお手伝いをしていきたいと思っております。

会員のたより

生きていくことへの感謝

藤原 絹子
（1977年入学）

この文章が皆さんの目に触れる頃に

は、信州もどとも、新緑が美しい季節になっていくことでしょう。何が起ころうとも、季節は巡り、美しい風景は私たちを蘇らせてくれます。ひたすら感謝です。

私は、信大を卒業後、民間企業を経



て国家公務員になり、二十数年間、労働省と厚生労働省で働いてきました。仕事は労働時間が長く大変でしたが、幸いなことに希望する国際畑の仕事を多くやらせていただき、最後は、九州で地域密着の仕事をする機会にも恵まれ、大いに感謝して退職することができました。

この最後の九州勤務では、二年間、家族から離れて過ごしたことで、大自然の中に身を置く時間が圧倒的に増え、私自身どんどん元気に、そして自由を謳歌できるようになっていきました。それはほんとうに素晴らしい体験の始まりでした。そして、こんな風にみんなが元気になって、自由を謳歌できるようにになったら素晴らしいだろうな、と思います、公務員を退職して、生まれ故郷の鶴岡で活動を開始しました。

それから、早、二年半たちました。「森や海」の自然体験ツアー「酵素玄米&菜食のヘルシー料理講座」「アロマやハーブ(葉草)などでのホリスティックケア」「子供・若者のフリースクール」「心・身・スピリットのためのセラピー

「スクール」など各種プログラムを、徐々に広げた地元ネットワークの中でやってきました。

みんなに元気になってもらいたいと始めた活動でしたが、今、振り返ってみると、これまでの活動はすべて、自分自身がさらに元気になるためのものだった気がしています。

生まれ故郷ののに行つたことのないところばかりだったとふるさとの山や海や森や野原。ほんとうに、その素晴らしいさにびつくりの連続でした。秋田との県境の鳥海山では至るところにある滝や川に、一年を通じて、ブナの原生林から湧いてきたキレイな水がとうとうと流れていて、身を浸すと生まれ変わるような清涼さです。また、日本海をゆっくりとカヌーでいくと、見たこともないような青い海と美しい海岸線が広がっています。幹線道路がすぐ近くを通っているのに、広々と広がっているブナ原生林では、四季折々さまざまな野草の花が咲き誇っていました。夏は海、滝・川の水辺で遊び、冬は二〜三mの雪の中、子犬のように転げ回って遊びます。半世紀も生きてきたのに、私は一体何をやってきたんだろうと、思ったほど、初体験のオンパレードでした。

自然の素晴らしさに触れ続けて、色々な活動をしてきたこの数年、自然への感謝、すべてのものへの感謝の念を強くしてきました。有数の米どころである鶴岡を含む庄内地方は、月山や鳥海山などの山々に降った雪が春になって解けて平野に注ぐことで、米も野菜も果物も豊かに育ちます。春先、用水路や川を流れるものすごい勢いの雪解け水に、思わず手を合わせずにはいられません。

今回の地震でも、かつて経験したことのないほど大きく揺れたにもかかわらず、庄内地方は被害がほとんどなく、

私の鶴岡の事務所でも安定の悪い棚上から何一つ落ちず、まるで、赤ちゃんの揺りカゴが揺れたようだと思つたとき、護られている事に感謝せずにはいられませんでした。

これからも、地元を中心に、各地の自然に触れながら、私たちも自然の一部であることを思い出し、いろいろな各種プログラムをやりたいと思います。そのためには、自然体験と同時に、継続可能な、自然に無理のない農業や園芸なども取り組んでいけたらと思つています。人間が生きていくことは、どれひとつ切り離すことの出来ないトータルな(ホリスティックな)営みですから、自然とふれ合つてその感覚を取り戻すことで、心身の健康も維持できると思つています。

昨年から母校の同窓会の理事をさせて頂いていただいたことを契機に、再び、信州にも足を運ぶ機会が増えました。信州の自然とのふれあいや、私と同じような活動をしている方々ともつながっていったらいいなと思つています。

**夢って何だったの？
(これまでの学生時代、
社会生活を振り返って)**

百瀬 礼三
(1984年入学)

本人はあまり頓着ないのだが、卒業してから既に二十数年も経ってしまった。今までに、何をやってきたか、出来たか、あるいは出来なかつたか考えてみると、よく出来たと自画自賛できるものは皆無に等しい。

齢はそれなりに取ってしまったが、このまま、五十になり、六十になり、七十になり、それなりの年齢になつたら、いずれは骨になるのだらうと思う。

世の中をあとと言わせてやろうとか、会社で出世してえらくなるうとか、お金を貯めて会社を興して一旗揚げようなどといふ考えもあまりないで、我ながらそういう欲はあまりないようだ。

現在、在学中、あるいは既に卒業されて仕事をバリバリこなしておられる方、仕事がなく大変な方、働けない方、色々な方、いらつしやるかと思つたが、私は出来るなら社会人としてぼちぼち引退ですよと言われる頃までは頑張つて打ち込めるような仕事があつて、後は自分の趣味を好きなだけ楽しめれば、これ以上のハッピーライフはないのではないかと思うようになった。

はて、私の夢って何だったの？と考へてしまふのだが、トンと思ひ出せないで、今はそれがささやかな夢ということになると思う。

そういうえば、よく考へてみると今までも特にこれといった夢を持つたことがないのだ。

子供の頃のお愛ない夢、ケーキを腹いっぱい食いたいとか、テレビの正義のヒーローになりたいとか、お金持ちになりたい、その程度である。

中学校、高校、大学と進学するにしたがつて、学歴だけは引つ付けてきたが、どうも何をやりたかつたのか、いまだにはつきりしない。

父親に小学校の頃、〇〇になれと言われたことは記憶にあるが、全くピンとこなかつたし、田舎の中学、高校では部活に精を出して、塾にも通つたこともないし、必死に受験勉強をやつた覚えもなく、いまだによく大学に入れたなと思う。

元々、進学を志望してはいたわけでもなく、当時もそうだが、今の時代は自分の学習能力、特に記憶能力が勉強できる尺度として数値化されやすく、それをもって、自分の実力はどの程度と

思い込んでしまつていたからかもしれない。

自慢ではないが、模試ではほとんどの大学が不合格圏内(?)で、実際の本番、共通一次(当時の入試方法の一つ)も良くもなく、数学も嫌いで、二次試験では選択の余地なく英語と小論文を選び、私ごときが大学に行けたのは一発逆転が可能な二次試験があつた本学部ならではの、小論文で入れさせてもらったと今でも思つているのだが、当時、偏差値などというものはあてにならないものだと思つたのも今となっては良い思い出である。

学生時代はアルバイトのやりすぎで不勉強がたたつて、二年から三年に上がる時には、あと一個落としたら留年というところでなんと引つかり、これはいけないと発奮して三年では真面目に授業に出て一応卒業までの単位が全部取れたので、これで卒業確定とばかりに四年では週に一コマきり、これだけは皆勤賞で行こうと決めていた高梨先生のゼミに出席させていだき、先生はもちろんのこと、良き先輩方、後輩、同級生と楽しく勉強させていだいた。全員とまではいかないが、今でも年賀状程度だがやりとりさせていだいている。

また、入学当初、私が入寮した時でさえ古い歴史を感じていたこまき寮はいまだにその雄姿を残しているようだが、そこで知り合つた他学部の同級生とも、いまだに年賀状のやりとりがある。

卒業してすぐ入社した会社にも経済学部の先輩方がおられて、いろいろお世話になつたし迷惑もかけた。

卒業生が何千人もいるマンモス私学に比べると、こじんまりとしているが、その分、人の顔が見える良い大学にお世話になつたなと思う。

この同窓会報を通じて、あまり交流

平成23年度総会案内

経済学部同窓会総会を下記のとおり開催いたします。
会員の皆様のご出席をお願いいたします。

信州大学経済学部同窓会

会長 矢口晋司

記

日時 平成23年7月16日(土) 午後3時より
場所 信州大学経済学部 新棟6階 会議室
議題 1 事業報告および会計報告の承認について
2 予算および事業計画について
3 同窓会設立30周年記念行事について
4 その他

- 議題に先立ち、経済学部長より、経済学部および信州大学の現況と展望について、ご講演いただく予定です。
- 総会後には懇親会を企画しております。(会費制 2000円)
- 総会および懇親会ご出席の方は、事務局までメールまたは電話(火、木の10~15時)でお知らせください。(メールアドレス、TELは一面参照のこと)



のない方たちにも「お元気ですか。私は相変わらず元気です」とご挨拶したい。さすがに体型はやや(人によって)はだいたいと言っご意見も・・・)変わってしまったし、人並みに悩みも増えたが。

さて、社会に出たら、生活する為に働いて生活の糧を得なければならぬが、それが社会人として最低限の義務であろう。

働かずに生活できるリッチな方、仕事したくても仕事が見つからない方、働こうにも働けない方もいらっしゃると思うが。

夢を実現して仕事をされている大変ハッピーな方というのは、何をやって

いるのだろうか。

私のような凡人はどうしても生活するだけでも大変なので、夢を見るなどたんでもないことである。

ただ、夢とは程遠いかもしれないが、目標を持つということは社会人には必須であろうと個人的には思っている。

例えば、英会話を習ったとすると、大体一年でカタコトで良いからしゃべれるようにして、海外旅行で役立てようとか、国家資格を一年以内に取つて自らのスキルアップをしようという類のもので、大手の会社だと個人目標を強要され、それに伴った人事考課というものがあって、賞与や昇給を決定する要素を組み込まれてしまうのだが、

これはあまり面白い目標とは言えない。努力はしなくてはならないが、人に強制されず、自分で楽しく設定できる目標はある種、自己満足と達成欲の表れで「プチドリーム(小さな夢)」というべきものであろうかと思う。

それが自身のスキルアップにつながるものであれば、尚更である。

最近、とみに勉強は一生物のだと感じる。

因みに私は、現在、なぜか中国語を習っていて、目標は一年程度でカタコトの中国語会話がこなせるようになることである。これがなかなか難しいけれど、面白い。

ある心理学者さんによると挫折しな

い人は次々と目標を持てる人だそうだが、失敗しても次の目的を決めて進む人は挫折しようがない。それは確かにそうだ。所詮一生、何も夢を持たないというのほもつたない。

私は夢というほど大それたものではなくとも、目標設定しながら、一つ一つ地道に自己満足していこうと思っている。

最近の就職難で現役の学生は大変だろうと思うが、結局頼りになるのは自分自身である。

時に失敗もあるだろうが、目標を持って自身のスキルアップを図りつつ、時に人生設計を修正しながらも、夢の実現に向けて努力されることを祈る。何ともまとまりのない文章だが、お愛嬌と笑って許していただきたい。合掌。

編集後記

三・一一東日本大震災において被災された会員の皆さまに対し、まずはお見舞いを申し上げます。

現在の同窓会会員八三二名のなかで、会報送付が可能な方は六六一六名であるが、うち東北6県に所在の方が一一〇名おられる。青森一七、岩手二二、宮城一〇、秋田一九、山形一六、福島二六、このほか隣接の茨城が一三である。

今回の大震災の特徴は、地震と津波ばかりではなく、それが原子力発電所を破壊し、原子力の制御不能という非常事態が発生したところにある。

同時に、それはエネルギーの供給を制約し、原発依存のエネルギー多消費型経済に反省をせまっている。

日本における原発推進の制度は、カクさん(当時の田中角栄首相)が一九七四年につくった電源三法である。

まず「電源開発促進税法」によって電力会社から税金(電源開発促進税)を徴収する。それを「電源開発促進対策特別会計法」による同特会(現エネルギー対策特会)へ繰り入れる。そしてこのお金をこの特会から「発電用施設周辺地域整備法」によって、原発設置自治体および周辺自治体へ、産業基盤や生活基盤の整備のための補助金として配分する、という仕組みである。

つまり公共事業補助金と見返りの原発推進であった。原発設置の自治体には、これによって雇用と所得があたえられたのである。ジェラルド・カーティス・石川真澄のいう『土建国家ニッポン』(一九八三年)であり、「日本型福祉国家」であった。

今回の大震災はこうして、これまでの経済や政治のあり方の根本的な再検討を提起してもいるのである。

(事務局)